

公立中高一貫校は何を目指すのか

―その地域的役割と展開に着目して

教育人間科学部 人間文化課程 4年

1255085 田中美咲

指導教員 藤掛洋子

筆者が高校生のとき、母校である福岡県立の高等学校において、ある教師と会話した内容がきっかけでこの論文を執筆することにした。その会話の内容とは。「同じ通学区域内のライバル校が中高一貫校になる。よって、優秀な生徒をそのライバル校にとられてしまうかもしれない。そうしていつかこの高校にも中等部ができる可能性もあるかもね。」というものであった。中高一貫校といえば、受験エリート校というイメージがあったため、公教育におけるエリート教育についての嫌悪感、そしてそもそも公立の中高一貫校を設置する目的はいったい何なのだろうか、そうしてこれからの日本は公立の高等学校も中等部をもつようになるのだろうか。そうすれば、いずれ小学生全員が進路に悩まなければならない時代が来てしまうのか。という疑問に対する答えを出すためにこの執筆に臨んだ。

まず、公立の中高一貫校の構想は昭和の高度経済成長期から行われており、長い議論を経て、平成9年に制度化された、比較的新しい制度である。そして、その設置目的は、多様化する社会のニーズに合うように、もっと生徒の興味、能力に合わせた教育を中学校の段階から行っていこうというもので、受験エリート校と全く違うベクトルを持っていた。むしろ、文科省は中高一貫教育による受験エリート校化に対して強く反対していた。

こうして設置されていく公立の中高一貫校は、建前上、個性あふれる教育を行うことを目的とされていたが、その裏には別の役割があると筆者は考えた。そうして、その公立中高一貫校が果たす役割は地域によって違いがあると捉え、それらを3種類に分類した。それが「私立対抗型進学校」、「公立対抗型進学校」、「地域人材育成型学校」である。

さらに、年代別にこれらの種類分けした学校の設置の傾向を見ていったところ、初めは「地域人材育成型学校」が多く設置されていたが、近年は進学校が中高一貫校化する例が多く、公立の中高一貫校は進学校化しているという読み取りができた。

そうして、進学校化する公立中高一貫校と、進学校化、受験エリート校化することを認めない文部科学省との間にズレが生じていることが判明し、そのズレが原因でこれから公立の中高一貫校は大幅な増加は見込むことはできず、全国の公立高校が中等部を持つという未来はまだ当分来ないのではないかという結論に至った。